

大谷 歩 提出 学位申請論文（課程博士）

『万葉集の恋と語りの文芸史』 審査要旨

論文の内容の要旨

大谷歩提出論文「万葉集の恋と語りの文芸史」は、『万葉集』に見える恋の物語りをめぐって、その作品の成立する状況を文芸の流れの中に捉えようとする論である。『万葉集』は、雑歌・相聞歌・挽歌の三部立てにより分類されている最古の歌集であるが、その中の相聞歌は大きな比重を占める。そこには作者未詳の多くの恋歌とともに、古くから伝えられた恋の物語りや、新たに作られた恋の物語りが含まれている。本論文は、この恋の物語りとして伝えられている作品群を文芸史の視点から論じることを目的としている。

全体の構成は、以下の通りである。「序論」（i 本論の目的と方法、 ii 『万葉

集』の恋と語りに関する研究史、iiiへ由縁をめぐるへ古物語りへとへ今物語りへ、iv本論文の概要)、「第一部 詞から歌へ」は、「第一章 真間手児名伝説歌の形成―「過」と「詠」の方法を通して―」(第一節 はじめに、第二節 赤人の「過」の歌の方法、第三節 虫麻呂の「詠」の歌の方法、第四節 おわりに)、「第二章 大津皇子伝と大伯皇女の相聞歌―へ内乱をめぐるへ今物語りへの形成―」(第一節 はじめに、第二節 物語りとしてのへ大津皇子伝への性格、第三節 へ大津皇子伝へにおける大伯皇女の位置、第四節 へ今物語りへの中の大伯皇女の相聞歌二首、第五節 おわりに)、「第三章 朝川を渡る女―但馬皇女をめぐる恋物語りの形成―」(第一節 はじめに、第二節 但馬皇女の歌の流通性、第三節 へ引用へと恋歌の流通性、第四節 「朝川を渡る女」の恋の物語りの成立、第五節 おわりに)、「第四章 「係念」の恋―安貴王作歌と左注の位置付け―」(第一節 はじめに、第二節 「係念」の訓詁と注釈、第三節 仏典語「係念」と左注の意図、第四節 安貴王作歌と左注の位置付け、第五節 おわり

に)、「第五章 嫉妬と怨情―古代日中文学の愛情詩と主題の形成―」(第一節はじめに、第二節 古代中国の棄婦詩と怨情詩、第三節 古代日本の〈嫉妬〉の歌と物語り、第四節 おわりに)の全五章による。「第二部 由縁有る歌と語りの形成」は、「第一章 桜児・縵児をめぐる歌と語り」(第一節 はじめに、第二節 婚姻の旧俗と新たな道德観、第三節 桜児・縵児の死の理由、第四節 桜と縵をめぐる歌とへ由縁)、第五節 おわりに)、「第二章 小泊瀬山をめぐる歌と語り―その流伝的性格の形成について―」(第一節 はじめに、第二節 『常陸国風土記』の「小泊瀬山」の歌、第三節 「小泊瀬山」をめぐる歌と語り、第四節 おわりに)、「第三章 怨恨歌の形成―〈棄婦〉という主題をめぐる―」(第一節 はじめに、第二節 主題としての〈怨恨〉の歌、第三節 〈怨恨〉から〈棄婦〉へ、第四節 おわりに)、「第四章 「係恋」をめぐる恋物語りの形成」(第一節 はじめに、第二節 「係恋」の仏典語としての理解、第三節 仏典にみる「係恋」の語の性格、第四節 「係恋」をめぐる恋物語りの成立、第五節

おわりに)、「第五章 愚なる娘と歌物語りの形成―「児部女王の嗤へる歌」をめぐって―」(第一節 はじめに、第二節 尺度氏の娘をめぐる妻争い、第三節 嗤笑歌の位置付け、第四節 「嗤咲」と「愚」の世界、第五節 おわりに)の全五章による。これに「結論」を加えて、本論部分は全十章より構成されている。内容は、以下の通りである。

「第一部 詞から歌へ」は、へ古物語りへからへ今物語りへへの展開を、文芸史的視点を加え作品の史的成立とその展開を論じるものである。

「第一章 真間手児名伝説歌の形成―「過」と「詠」の方法を通して―」は、葛飾の真間手児名の墓を詠んだ山部赤人と高橋虫麻呂の作品を取り上げ、赤人歌の題詞の「過勝鹿真間娘子墓」とある「過」が、ある場所を過ぎる折に旧跡における過去の歴史や伝説を回顧し、それらと一体となることによって自らの感懐を述べる方法であり、抒情的性格が強い内容であることを指摘し、これに対する虫麻呂歌の題詞は「詠勝鹿真間娘子」とあり、この「詠」は『文選』の「詠史」に

みられる実在の人物あるいは伝説上の人物の人生やその歴史を詩に託し、詠み上げる方法に接近していることを指摘する。この二つの作品には、旅の途次でへ古物語りへが再生産される状況のあることが指摘されている。

「第二章 大津皇子伝と大伯皇女の相聞歌へ内乱へをめぐるへ今物語りへ」の形成へは、へ大津皇子伝へ」の存在を想定し、そこに参画する大伯皇女相聞歌二首の位置付けを行う。大津皇子の伝は、『日本書紀』『懷風藻』『万葉集』に見られ、『万葉集』には同母姉である大伯皇女の歌が、大津皇子との関わりでのみみられ、「大津皇子竊下伊勢神宮上来時」の歌は、姉弟の密通の時、あるいは大津皇子謀反事件の時の歌と考えられてきた。題詞の「竊」の字は、他の作品から「竊通」を示す語であり、それを大津皇子伝に重ねると、へ密通へ」の相は石川郎女との「竊婚」が担い、へ内乱へ」の相は伊勢神宮への「竊下」が担っていると指摘し、そこにへ大津皇子伝へ」が成立していたこと、そこには悲劇の英雄のへ古物語りへ」の型を踏襲しながら、近時の悲劇の皇子のへ今物語りへ」として成立したこ

と、姉大伯皇女相聞歌もまた、この悲劇への予感と、弟に対する姉としての愛情をうたう作品として、〈大津皇子伝〉の中に位置付けられることを論じる。

第三章「朝川を渡る女―但馬皇女をめぐる恋物語りの形成―」は、卷二の但馬皇女の相聞歌三首を対象とし、ここに展開する皇女の恋歌と語りの形成を考察する。当該の作品は題詞と歌との関わりによって物語り性の強い作品として理解されてきたが、本論文ではこの作品が〈古物語り〉から〈今物語り〉への展開の状況が認められることを想定し、三首の歌の形成を〈類型〉と〈引用〉という方法から考察する。三首の特徴として歌句の一致や類似によって歌の性格を規定する〈類型〉と、特定の言葉を詠み込むことによってある物語りを想起させる〈引用〉の方法によって成立していること、〈引用〉という方法は、一つの典拠を引き出し、〈類型〉により示唆される恋情の普遍性を導くものであると指摘し、それは過去の〈古物語り〉を引き出して重ねることで、新たな物語りを予想させる方法であるとする。しかし、三首目の「朝川渡る」の歌は、これらの恋歌の伝統

から逸脱し、〈類型〉にも〈引用〉にも拠らないこと、それは但馬皇女という存在が作品形成の根拠として位置付けられたのだとし、そこに〈古物語り〉からの脱却があり、〈今物語り〉の成立があつたと結論した上で、文芸史の上から〈古物語り〉から〈今物語り〉への過渡的状況を示す作品として位置付けられると指摘する。

第四章「『係念』の恋―安貴王作歌と左注の位置付け―」は、巻四の安貴王作歌の左注にみえる「係念」の語に注目して、安貴王の〈今物語り〉としての悲恋物語りの形成を考える論である。左注では王の采女への愛情を「係念極甚、愛情尤盛」と説明し、「係念」の語は集中孤例であり、小島憲之氏により仏典語であることが明示されたが、それを作品理解に反映させる試みはなく、本論文は左注の「係念」を仏典語として捉え直し、当該作品の位置付けを試みる。仏典語「係念」は、第一に〈仏への専心〉であり、第二に〈色欲への迷いの戒め〉を説く修行法であるが、当該左注の「係念」は、この二つの意味を受け取りながらも、第

一の「采女への専心」は「采女への専心」へと転換され、第二の「色欲への迷いの戒め」は「采女への迷い」へと転換されたものであることを指摘する。仏典語の「係念」の意味を引き取りながらも、それを采女への専心と采女への愛情の深さへと変質させる転換は、仏典語「係念」を十分に理解した用法であったこと、男女の愛を徹底して排除する仏教思想と対峙することで、より強い男女の愛情の物語りへと展開させたのが安貴王の恋であり、それは今に生きる人物を主人公とした「今物語り」としての性格をみることができるのだとする。

第五章「嫉妬と怨情——古代日中文学の愛情詩と主題の形成——」は、古代日中文学の「嫉妬」と「怨情」の詩歌を取り上げ、愛情にまつわる文学の形成の状況を、比較研究の方法を通して考察する。古代中国文学には棄婦詩が存在するが、それが後に「怨情」の詩歌を生み出してゆく状況を、『詩経』『国風歌謡』や『玉台新詠』の古詩に求め、ここでは「棄婦」である自らの運命を受け入れ、夫への怨みの情を述べることはないこと、これは班昭の「女誡」にみるような儒教的道徳観

による態度であろうと想定し、六朝情詩に至ると閨房の中で訪れない夫を嘆く〈怨情〉の詩へと至ることで、そこに怨恨が主題化される状況がみられるのだとする。古代日本文学では中国文学が理解されながらも、一方に〈嫉妬〉の文学が存在すること、そこには中国の詩が夫婦関係を基本として愛情詩が成立しているが、古代日本では男性が複数の女性と関係を持つ、妻問婚の中に男女の愛情関係が成立していることの違いがあり、自分のみを愛さない男を不実な男として批判し、磐姫皇后のように激しく〈嫉妬〉をする女性は、愛する男性を独占したいという思いがあり、それが〈嫉妬〉という感情を生むのであると指摘する。それは同時に嫉妬の感情に苛まれる苦しみを抱え込むことにもなり、その葛藤の中で女歌の〈内省〉を導いていくのであると結論する。

第二部は「由縁有る歌と語りの形成」と題して、卷十六にみられる〈由縁〉を持つ男女の恋や結婚にまつわる歌と語りを対象とし、そこにみられる特殊な用語に着目し作品の形成を論じる。

第一章「桜児・縵児をめぐる歌と語り」は、卷十六冒頭の桜児・縵児の歌と物語りを取り上げ、複数の男から求婚された女性が死を選ぶ理由と、男たちが詠む歌のへ由縁へについて考察する。この物語りを神の妻の時代から人間の時代へと移行する段階にあらわれたことを想定し、桜児・縵児の死の理由は、複数の男性から激しく求婚されるという異常な状況があり、それは本人の意志に拘わらず、結果的に共同体からは「男を惑わせる淫らな女」とされたこと、それは共同体の秩序を乱す存在として位置付けられたことが想定されるとして、その結果、自ら死を選んだとする。これは二人が人間の側に属すことで悲劇が生まれたのであり、その悲劇的な死に男たちは桜や縵をよすがとする歌を残すことで、彼女たちの美しさと共に、桜と縵の美しさの起源伝説として、年毎に語り継がれるへ由縁へを持つ歌として成立したのだと結論する。

第二章「小泊瀬山をめぐる歌と語り―その流伝的性格の形成について―」は、『万葉集』卷十六と『常陸国風土記』にみられる「小泊瀬山」の歌をめぐって、

それぞれの歌と語りの形成の状況を論じる。二首に共通する「小泊瀬山の石城」は、男女が「隠る」場所であり、そこには恋にまつわる何らかの比喩があると推測する。『常陸国風土記』の場合は、古老伝承から推測すれば、山賊であった油置売命の魂を慰める歌として成立し、「石屋」が歌と物語りとを結ぶよすがとなる場所として伝えられていたとする。卷十六の場合も、男女の恋における比喩と捉えられ、歌は左注によれば弱腰になった男に対して贈った女の歌であり、女はかけおちや情死をも辞さない覚悟を、「小泊瀬山の石城に隠る」と表現したとする。いわば、「小泊瀬山の石城」とは、世間から指弾されることが予想される男が、最後に逃げ隠れる場所であることを示唆し、それは成語（慣用語）として存在したことを論じる。それは、窃かに恋をした男女の行き着く場所としての比喩と考えられ、共通の理解をもった成語が「小泊瀬山の石城に隠る」ことであり、歌はそれぞれの男女の恋の事情に応じて歌に詠まれたものと結論する。

第三章「怨恨歌の形成―へ棄婦―という主題をめぐって―」は、卷十六に載る

男に棄てられた女の怨恨の歌二首とその語りをめぐって、〈怨恨〉と〈棄婦〉を鍵語に作品の形成を考察する。こうした作品成立の背後に棄てられた女による〈怨恨〉という主題があり、女がいかにして男との破局に向き合ったのかを語ろうとしている意図が窺われるとする。そうした主題は中国の棄婦詩にもみられることから、大伴坂上郎女の「怨恨の歌」を取り上げ、この歌が破局への懼れを抱きながらも、一方では訪れの期待も残されていて、その不安と葛藤の中に存在する歌であるが、当該作品の娘子は「寵薄れたる」ことで「寄物」を返却され、また夫が「他妻を娶」って「裏物」のみを贈ってきたことで破局が確実となった時の歌であることから、ここには〈棄婦〉の主題が明確に現れていて、待つ女から怨む女へという、女性の心的態度を映し出した作品であると結論する。

第四章「『係恋』をめぐる恋物語りの形成」は、卷十六の「夫の君に恋ひたる歌」という同じ題詞を持つ二つの作品を取り上げる。一つは長反歌と或本の反歌という構成で、左注には車持娘子が夫の通いが途絶えたことで病に臥し、死ぬ間

際に訪れた夫に歌を詠み掛けたが身まかったというへ由縁をを持つ歌で、娘子が夫に対して抱いた恋情を「係恋傷心」という。もう一つは、左注に佐為王の近習の婢が宿直で夫に逢えず、夢に夫の姿を見たが触れ得ず、咽び泣きながら歌を詠んだところ、歌を聞いた王が宿直を免除したというへ由縁を持つ歌で、婢の夫への思いを「係恋実深」という。この二つの「係恋」の語は仏典語であると指摘されているが、小島氏は仏典語としての意識は稀薄であるとする。しかし、本論文では『大正新脩大蔵経』に十数例しかみられない特殊な言葉であり、仏典語の意味から一般化された言葉として扱うには検討の余地があるとし、仏典語「係恋」の用例を分析して、そこには、①思慕、②愛着、③執着の三つの意味を見出し、当該の二作品は、②の愛着にその意味を求め、この語を『万葉集』の恋物語りに使用する時に、これが仏典語であることを十分に理解した上で、仏典語の意味を転換させ、男女の強い愛情を表現する言葉として用いたものであると結論する。そこには、『万葉集』の男女の恋の語りが仏教の時代に入り、仏の説く愛の

執着への戒めと、男女が尊重する愛への執着とが対峙する段階へと至っている状況を読み取ることができるのだとする。

第五章「愚なる娘子と歌物語りの形成―『見部女王の嗤へる歌』をめぐって―」は、卷十六の「見部女王の嗤へる歌」の左注にみえる「愚」として「嗤咲」される娘子の物語りと、見部女王の嗤笑歌を対象とする。この娘子は、「高姓美人」の「詭」を拒否し、「下姓媿士」の「詭」を許したと伝えられ、そのことを女王が「愚」として「嗤咲」したのだということの問題として、ここには妻争いの話型を背景としていること、しかし、娘子が一方の男を選択したことでその話型からの逸脱が読み取れることを指摘する。娘子の選択を女王は「愚」として「嗤咲」するが、この「嗤咲」は漢語「嗤笑」と同義であり、これは仏典に散見される語であるとし、仏典語「嗤笑」は、『百喻経』などに世間の常識から外れた、道理をわきまえない愚行に向けられる笑いとしてみえ、女王も世間の道理を弁えない、非常識な選択をした娘子を「愚」として「嗤咲」したのであるとす

る。いわば、女王が「高姓美人」を選択すべきであると判断したのは、当時の社会常識を価値とする態度であるが、娘子は男の容貌でも身分でもなく、「下姓媿士」に見出した真の愛情を価値としたことによる選択であると結論する。

以上のように、本論文は第一部では「古物語り」から「今物語り」へという、『万葉集』の恋物語りににおける歴史的展開を論じ、第二部では「古物語り」を背景に持ちながらも「今物語り」の中にあらわれる歌にまつわる「由縁」の内実を、漢語や仏典語などの特殊な言葉に注目しながら論じる。

論文審査の結果の要旨

大谷歩提出論文「万葉集の恋と語りの文芸史」は、『万葉集』にみる男女の恋を主題とした歌と語りの成立と、その史的展開を考察するものである。そのために本論文では物語り形成の歴史を、「古物語り」から「今物語り」へという流れ

を想定し、それを〈文芸史〉の視点から位置付けることを試みる。ここにいう〈文芸史〉とは、小西甚一氏の「日本文芸には、日本固有の性質と外国文化との接触により変化させられた性質とがあり、両者が結びついて『日本文芸の特質』を形成している」という考えに依拠し、外国文学との対比により見出される特徴を日本文芸の特質とし、それを史的に考察することを目的としている。本論文の〈文芸史〉は、中国文学との対比によるものであるが、それを通して『万葉集』の中の恋の物語史ともいえる恋愛の歴史を、個々の作品を通して体系化しようとするものである。その具体的方法として、一、神々の愛の歌と物語りが、人の世へ移行する際に生じた愛の悲劇の歴史に視点を向け、それを文芸史の方法によって追求すること、二、男女の愛の成就と挫折の物語りに見出される、特殊な漢語・仏典語に注目し、それを文芸史として追求することにあるという。このことを前提に本論文は展開するが、以下、本論文のいくつかの章に触れて、その妥当性と課題について触れておきたい。

第一部の第一章「真間手見名伝説歌の形成―『過』と『詠』の方法を通して―」は、地方の真間手見名伝説を素材とする山部赤人歌と高橋虫麻呂歌の歌を取り上げ、赤人のは娘子の墓を「過きる」時の歌であることに注目し、これが「過去の記憶や歴史に引き寄せられたことが作歌契機となり、その旧跡における過去の歴史や伝説を回顧し、それらと一体となることによって、自らの感懐を述べる方法」であり、虫麻呂のは娘子の墓を「詠む」歌であることに注目し、これは「詠史」の方法により導かれたことを指摘し、詠史は中国詩において過去の人物や伝説の人物の人生や歴史を詩に託すものであり、虫麻呂の歌は「詠物」の方法を取りながらも、娘子の容姿や人生を詳細に描写するのは、伝説の人物である娘子を現実存在した歴史として描くことが意図されているのだと結論する。赤人の題詞の「過」が、柿本人麻呂に見られる用法であり、それは史実を叙事的に詠むのではなく、「見れば悲しも」という感懐へと向かうのを特質としていて、赤人の「過」がそれと一体となり、自らの感懐を述べる方法であり、虫麻呂の

「詠」は、中国詩の「詠史」が意図されていて、そこに人物を描写する表現が見られるというのは、十分に妥当であろう。

第四章「『係念』の恋―安貴王作歌と左注の位置付け―」は、安貴王が八上采女を娶ったことにより、勅断により不敬の罪を得て、別離させられた時に王が詠んだという歌を対象として、左注にみえる「係念」の語に注目する。この語は出典不明とされていたが、小島憲之氏により仏典語であることが指摘されたのを受けて、仏典から多くの「係念」の語を取り上げて分析し、「係念」とは修道者が仏に専心すること、愛欲を除くことであることを見出し、安貴王歌の左注の「係念」とは、〈仏への専心〉から〈采女への専心〉へと転換されていること、「係念」による〈色欲への迷いの戒め〉から〈采女への色欲の迷い〉へと転換されていることを指摘し、ここに安貴王が采女へ専心した結果として罪を得たという恋物語りが成立したのだとする。今日でも「係念」の語の意味は「恋すること」と理解されるが、これを仏典語として捉えることで、この作品の意義が明解に理解

されることになり、きわめて意欲的な論であるといえる。

第二部の第一章「桜児・縵児をめぐる歌と語り」は、複数の男性から求婚されて自死する女の物語りを対象とする。これらは神の妻の時代から人間の時代へと移行する段階にあらわれた悲劇のへ古物語りへであったと想定し、律令以前の妻問い婚を継承しながら、やがて律令時代の新たな儒教思想に基づく家族制度の出現により、理想的な妻の行いを規範とすることが求められたこと、そのことから古代の結婚には、①社会や世間の習慣を守り、親族から認知されて結婚することを一般としながらも、②親からも世間からも認知されず、一人の女としてひそかな結婚（自由婚）へと向かう者、という二つの系統が認められ、桜児・縵児の死は、①にありながらも、世間の男たちに騒がれることで②の状況が生じたことによる悲劇であったとする。また、この物語りは桜と縵がなぜ求められたのかの理由を語る起源譚として、この悲劇の物語りが生成されたこと、当該作品は、この二重のへ由縁へを持つ歌として成立したのだと結論する。宴楽で桜や縵を挿頭と

して楽しむ風流を求めた人々の中に、桜や縵の美しさとその哀惜があり、それらがこのような物語りを生み出したとするのは妥当であり、新たな見解として注目される。

第五章「愚なる娘と歌物語りの形成―『見部女王の嗤へる歌』をめぐる―」は、貴公子との結婚を断り、醜い男を選択した娘子に対して、見部女王が愚として嗤笑した話である。本論文ではこの愚と嗤笑に注目し、これが仏典語に因ることを確認し、この話が『百喻経』にみえる愚人の例話を喩として嗤笑する型を踏まえ、当該作品は『百喻経』の《愚―嗤笑―喩》と等しい話形を持つことで成立したことを結論としている。ここには、常識的な結婚（地位・物質）に価値を見出す女王の立場と、世間から笑われる結婚（愛・誠）に価値を見出す女の立場とが相克し、それはこの時代の結婚観を示す物語りであり、まさにへ今物語りとして成立したとするのは、論証も行き届き勝れた論である。

以上のように、本論文の独自性は、『万葉集』に見る恋の物語りを、一に、へ古

物語りへからへ今物語りへへの展開として捉えるところにあり、二に、それらの恋の物語りに見える漢語や仏教語の意味を検討し、作品解釈に用いているところにある。その上でこれらの恋の物語りを文芸史として展開したところであろう。古物語りから今物語りへの展開の論理は、文芸史という視点に立って有効に働いているといえる。もちろん、現在の『万葉集』の研究において、漢語や仏典語に十分に注意が払われている訳ではない。その理解の上から作品そのものに返すことは容易ではないが、その説得性を持つためには、さらに作品との関係を具体的に説くことが求められるであろう。それは今後の課題として残るが、本論文が目的とした内容は十分に説かれているといえる。よって、本論文の提出者である大谷歩は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成二十七年二月十四日

主查 國學院大學教授 辰巳正明 印

副查 國學院大學准教授 谷口雅博 印

副查 東洋大學教授 菊地義裕 印

副查 奈良大學教授 上野誠 印

大谷 歩 学力確認の結果の要旨

左記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士(文学)の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十六年十二月十九日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	辰巳正明	印
副査	國學院大學准教授	谷口雅博	印
副査	東洋大学教授	菊地義裕	印
副査	奈良大学教授	上野誠	印